

高細密な意識情報の喚起に適した 局所荷重型質量傾斜装置

An equipment of Mass-Inclination using local load
suitable for awaking dense conscious-information

大兄 太子
Ooe Taishi

遠智 要
Ochi Irazu

フロイライン・ヘルスケア東京研究所
外郭部門質量傾斜研究科 内生部門発生自我研究科

Department of Mass-Inclination, Faculty of outline
Department of self-occurrence, Faculty of endogenous
Tokyo institute of Fräulein health-care

1. あらまし

本稿は、質量傾斜研究科及び発生自我研究科の合同研究成果を報告するものである。我々Y-omeの最終目標は言うまでもなく「理想の女性の創出」唯一であり、単一の研究項のみではその意味をなさない。統括的な女性創出計画を推し進めるため、東京研究所に総合創出委員会が設置されたことは記憶に新しい。ここで、複合研究において問題となるのは、単一の研究項を別の研究項と組み合わせる場合に、統合前の研究成果が十分に再現されなくなることである。直近では服飾部門において、PI-Si ハイブリッド素材の傾斜対生成実効値が、既存の加速器を用いた量子対生成効率を下回る例が実際に報告されている[1]。このように、複合領域における技術のブラッシュアップが

我々の大きな課題となっている。

とりわけ、質量傾斜技術[2]と網心理論[3]の複合技術は、両者が基幹技術であることから無視のできない研究対象である。先行研究[4]で傾斜生成された真核細胞は、アポトーシスを含む命令遂行能力は高いものの、可用性に乏しく、接続できる情報網の密度が低い。そのため、生成体へ喚起した意識の質が、我々の目標とするレベルに至らない可能性が指摘された。喚起シミュレーションの結果、自我境界に基づく意識抽出精度やクオリアの再構成に対する安定性などが課題に挙げられている。

本研究では、情報網密度が高く複雑系を持つ人造女性の創出を念頭に置き、安定した発生自我の分離及び喚起が可能な局所荷重型質量傾斜装置を作成、傾斜生成実験を行った。

2. 質量傾斜理論

質量傾斜理論[2]は、真空の相転移を引き起こすポテンシャルの坂（傾斜場）で物体を移動させ、任意のエネルギー及び質量を傾斜場から取り出す過程を体系化したものである。ここでは、質量傾斜理論の基本的概要を述べる。

ある質量 $m(\exists m \in \mathbb{R})$ を持つ物体を傾斜上の位置AからBまで移動させるとき、質量傾斜理論の基本法則は、

$$m_A + I \rightarrow m_B + \Delta E \quad (1)$$

の状態式で表される。 I は真空の角度、すなわち偽の真空から基底状態までの傾斜差である。ここで、物体にエネルギーを与えて動かすのではなく、傾斜場を上下させることで物体を移動させるという点に着目すると、質量とエネルギーの等価性から、

$$E_B + I \rightarrow E_A + m \quad (2)$$

と式(1)を再定義でき、傾斜場から取り出したエネルギーによって任意の質量を生み出せることがわかる。

3. 局所荷重型質量傾斜装置の作成とその経緯

網心理論[3]によると、立体網構造を持つ情報網の「密度」と「規模」が、意識の質に関わっており、傾斜荷重下では特に「密度」が重要なパラメータとなっている。また、意識情報の喚起（アウェイキング）後、傾斜

生成体は情報網に常時接続し続けなければならない。このことから、生成体の安全な生命活動維持を前提とすると、「密度」と「規模」のパラメータは基本的にトレードオフの関係となることが明らかになっている。この関係性が崩れてしまうと、発生活自我が暴走、あるいは消失してしまう危険がある。また、既存の傾斜装置でアウェイキングを行うためには、ある程度の「規模」が担保されなければならない、目標とするレベルの「密度」を得るには限界があった。

今回、我々は情報網の「密度」を最大限に引き出すことを目指し、傾斜荷重下で単位時間に運用する情報網を絞り、局所的にその「規模」を縮小する手法を考えた。この手法を既存の質量傾斜装置に導入し、運用情報網を自由に絞ることが可能な局所荷重型質量傾斜装置を作成した。傾斜荷重を行った結果、高細密な脳細胞（写真1）の生成に成功し、サーフェイス LAN を介して情報網への接続が確認された。



写真1：生成された脳細胞（右脳詰め）

4. むすび

今回の研究では、新たに考案した局所傾斜荷重法を利用して情報網の「規模」の縮小が可能となり、「密度」の高い情報網に接続できる脳細胞の生成に成功した。これにより、今までシミュレーションで行われていたアウェイキング実験が、具体的な創出実験段階へと移行できることが実証された。また、比較的ハードウェアの制約がなくソフトウェアの変更のみで実装できるという強みもあり、今回提案した手法は新年度にも完成が予定されている平面式質量傾斜装置への組み込みが既に決定されている。今後の計画としては、今回の研究を応用して傾斜装置自体の「規模」、サーフェイスのさらなる小型化が可能なのではないかと考えている。

局所傾斜荷重法の構築段階で、情報網に常時接続しないで離散的に傾斜荷重を行うアプローチも議題に挙がったが、この手法により誕生した生成体の認知アーキテクチャが複雑系を獲得する可能性は限りなく低く、今回の研究目的とは合致しないとみなした。しかしながら、離散型傾斜荷重法は中間アウェイキングによる生成体の模擬生成に対しては相性が良いので、完全生成を目的としないデバッグ用途には研究余地を残している。

参考文献

- [1] Oswald, Tachibana, 清正 和泉, “複雑な模様を有する傾斜服飾生成に関する報告”, 白飾七年度中期 Y-ome 主要機関研究報告会
- [2] 大兄 太子, 遠智 要, 葛城 斉明, Longroad. Unnecess, “質量傾斜理論概要”, 竹間財団研究会誌 vo.18, pp.3-51, 鳴和十八年
- [3] 遠智 要, 在原 露, “立体網構造を持つ情報空間を利用した意識生成モデル”, 第九回 理田情理学シンポジウム, 白飾三年
- [4] 大兄 太子, 遠智 要, “マイナス 2N 構造型傾斜荷重法による真核生物の生成”, 白飾七年度下期 Y-ome 主要機関研究報告会